

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第 67 号
平成 28 年 7 月
生涯学習課

地域と戦争2016

展示期間
平成 28 年 7 月 2 日(土)～10 月 2 日(日)
(図書館休館日は除く)
※期間中、一部展示資料を入れ替えます

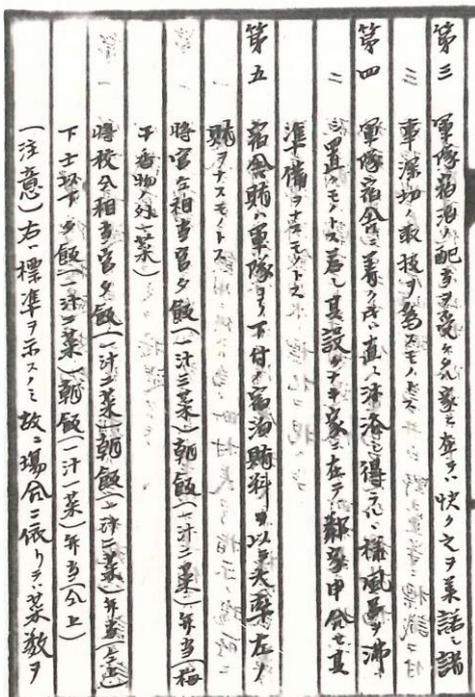
戦後 70 年を過ぎて戦争体験者の高齢化が進み、その体験を次代に伝えていくことが課題となっています。今回は、明治・大正期から軍隊・軍事が地域や住民の身近に存在し、昭和の戦争期には徴兵以前の青年層にも浸透していた様子を示す資料を紹介し、平和の尊さを考えるきっかけとします。

軍隊の民家宿泊

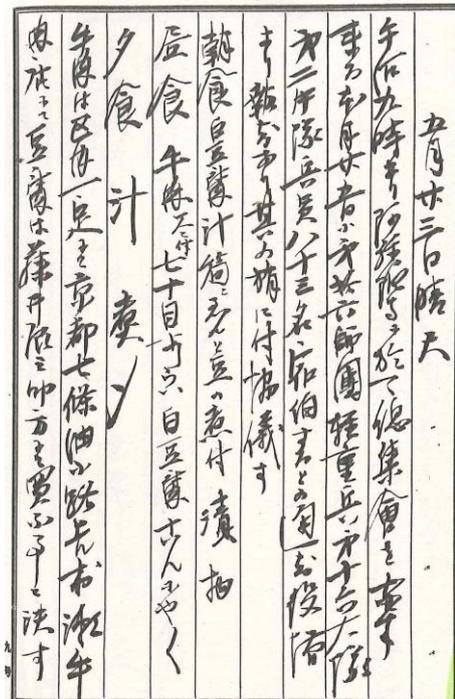
軍隊は戦時に限らず、地域の人々の身近に存在していました。平時でも訓練などのために軍隊が地域を通行し、宿泊することがありました。

軍隊が宿泊するときは民家に分宿することも多く、その場合は地域に兵士の食事や風呂・夜具の準備・提供が求められました。それらの費用はあとで支払われますが、宿泊の通知は直前であることが多かったようです。

海印寺村下海印寺区の日誌には 80 人・100 人・150 人といった大人数の宿泊記録が見られ、その食事用に、蒲鉾・牛肉を村外の商店で大量に買い求めたことが分かります。



「軍隊接遇規約」 明治 33 年 (1900)
新神足村神足区では、今後通過・宿泊する軍隊を一定の方法で接待するために、風呂・夜具の準備や夜間の軒下点灯を定め、食事の標準を示しています。



軍隊の宿泊 大正 12 年 (1923)
海印寺村下海印寺区の日誌。2 日後の 5 月 25 日に第 16 師団輜重兵 (しちょうへい) 83 人が宿泊するという通知があり、区では総集会を開いて兵士の食事について協議しました。
(下海印寺区有文書)

